## 意見交換の概要
## （平成 30 年 8 月 29 日（水）・愛媛大学）

### １．耕作放棄地の問題について

僕は今、大学で、地域に関する学問である社会共創学、領域としては農業を学んでいる。大学を卒業したらすぐ就農して、愛媛でかんきつをつくろうと思っている。

１つ農業の問題として耕作放棄地が挙げられると思うが、僕が考える中で、増えている耕作放棄地の中にも、農業に適している耕作地と適していない耕作地があると思う。適している土地に対しては自然に、農業法人であったり県はじめ行政が力を注いでいくと思うが、適していない土地に対してどうアプローチしていくのか。農地として引き続き使っていくのか、それとも農地として使うのではなく、例えば地域の農業の共同ラボを立ち上げて、環境変動に対する適応の研究をするとか、土壌分析をするとか、そういう使い方がもろもろあると思うが、不適地に対してマクロ的な視点でどうアプローチしていこうと思われているのかお伺いしたい。

**【知事】**

農業の場合は、個人で持っているケースが多いので、なかなか農業関係者というのは土地を貸したり、売ったりするのを嫌がる傾向が強いんですよね。だから、昔の大地主制度から戦後、小作に対して農地を提供したという歴史があるので、土地への執着心が我々が思っているより強いんですよね。だから、もし業として農業を考えるならば、利益を上げなければ長くはやれないので、利益を上げる農業の方向性はおよそ２つしかなくて、１つは土地を集約化して大規模化し、そしてコストを下げていく。いわば大量生産という形でコスト整備で量を売っていくか、あるいは少量でも徹底的に付加価値を追求してほかにないもの、そして品質の高いものを生産し、そしてそれを少量でも値幅、値取りをしっかりしてやっていくか。どっちかしかないんです。

かんきつの場合は、傾斜地という制限のある土地の利用になるので、どちらもやっていかなければならない分野だと思っています。傾斜地というのは作業もやりにくいし、労力もかかるんだけれども、その分、品質のいいものをつくりやすいという自然のもたらした恵みもあるわけです。特に、今回被災したところなどは、なぜおいしいみかんができるかというと、太陽の光の加減だと思うんです。１つは、海からの照り返しがある。上からの直射の照りつけもある。段々畑なので、コンクリートで畑というのはつくられているんだけれども、コンクリートの照り返しもある。要は、傾斜地というのは海、上、下のまんべんなくあらゆる方向から太陽が降り注ぐので非常に糖度の高い品質のいいものができるのが愛媛かんきつの強さになっているんです。例えば、お年を召した方も出てきたので、やめようかなという人もいるけれども、やる気のある人もたくさんいて。特に今回、吉田町などは若い後継者いっぱいいるからね。行ったことある？

**（参加者）**

うちの地元がそちらなので。

**【知事】**

あー、そうか、そうか。あそこは若い後継者たくさんいて。

みんな言わないけれども、今回被災がない状況の中で考えると収益は上がっているんだよね。はっきり言えば。農業をやっている人たちは傾向があって、収益が上がってもうかっていても、もうかっていますって言わない。だから、そういう実態がなかなか伝わらない。厳しい、厳しいという声がやたらでかい。だから、イメージとして農業ってもうからないんじゃないか、大変なんじゃないかってイメージが出来上がってくるけど、実態は全然そうじゃなくて、成功している人は数千万円の年収を持っている人もたくさんいる。

そういう中で今回特に提案しているのは、若い人が多いので、耕作放棄地ややめる方も含めて、

逆にピンチをチャンスに変えるぐらいの気持ちで地域の皆さんで相談して、担い手に集約しませんかと。集約することによって、実はある制度がある。担い手に最終的に集約するという条件で、ある機構に譲ります。利用権は移転します。ただし 15 年間という期限限定。その再編整備の費用は全部そこがやります。５年目からはつくったものは自由にやってください。そこから上がる収益も取ってください。15 年経ったら利用権もお返ししますという制度がある。これを活用して、将来に備えた再編をやりませんかというのを今、吉田町には投げ掛けています。これは別に吉田町だけではなくて、被害のあった今治や松山でも対象地があるので、場合によってはそういったものを適用して、今回の被災対策としては、今の集約を含めた不適地とはあまり言いたくないけども、集約を図っていきたいなと思っています。

不適地というのは、今放棄されているから不適である場合がほとんどであって、例えば、土壌の改良等を重ねていけばいい。例えば、今までつくったものを違う作物かもしれないけど、十分に生かせる作物というのはあります。それは愛媛県が農林水産研究所をもっていますから、こういう場所、こういう土壌にはこの作物がいいよ、とか。いろいろな提案ができるので、それは一緒になって考えて、耕作に適さないというよりは、耕作に適するような土地にしようというフォローを愛媛県のほうではしていきたいと思っています。

ですから、あくまでも農業をやっている方というのは、土地への執着が強いので、なかなか貸すとか売るということができない状況が長く続いていたんだけれども、災害のこと、高齢化が進んでいるから、もうそろそろ農作業はきついわいね、という人たちもたくさん出てきているので、そろそろどないでっかと。若い人に任せてみたらどうですかというアプローチをしやすい環境が生まれつつあるのではないかと思っていますので、前向きにぜひ。君みたいに若い人が捉えて、やり方によっては十分収益が上がるので、自信を持って頑張ってほしいと思っています。

**（参加者）**

僕もつくったかんきつを献上できるように頑張ります。

## ２．東京オリンピック・パラリンピックに向けた愛媛の教育について

私もスポーツをずっとしているが、この前、マレーシアのバドミントンチームの方が来て親善試合をしているのを見学させていただいた。えひめ国体も終わって、次は２年後に東京オリンピックがあるが、都内の学校ではオリンピック・パラリンピック教育などに結構力を入れていると聞いた。愛媛県の学校ではどのようなことを教育機関が行っていくのかということをお伺いしたい。

**【知事】**

去年、国体があって、国体で何が残っているかというと、国体をやりたいと手を挙げたのは平成 11 年ぐらいだったんですね。18 年前から準備し始めました。実際に、この５年の間に施設の整備を行いました。それは国体競技をやるにあたっては、各競技団体ごとにこれぐらいのきちんとした施設じゃないと許可しませんという基準があるので、そのチェックが入りますから、全ての競技において各種目ごとの協会が認定した施設になったんです。これを生かさない手はない。これがまさに１つのレガシーですね。

今、東京オリンピックに向けまして、この施設をどういうふうに活用しようかということがまず第１点やっています。例えば、この秋には全日本の学生テニス選手権大会が愛媛県で行われるんですけれども。毎年これは東京の有明コートというところで行われていたんだけれども、オリンピック向けに工事が始まって使えない。しめたというのでアプローチして、国体で出来上がったばっかりなので、うちでやりませんかと言ったら、うまくはまって、全日本学生選手権を愛媛でやりましょうということになりました。こういうふうに今、施設ができているので、しっかり

とアプローチすれば全国大会とか西日本大会とか、種目ごとに大きな大会を引っ張って来れるという環境があるので、これは大いに活用していきたいと思っています。

それから、オリンピックということの限定になってきますと、これは各種目や地域でどういう考えなのかを聞きながらやらないといけないんだけれども。バドミントンはたまたま僕、愛媛県バドミントン協会会長をやっていました。自分もバドミントンの選手だったので、どこか強豪国のオリンピックの事前合宿取れないかなと思ってアプローチしてきた１つの国がマレーシアだったんです。

マレーシアという国においては、バドミントン競技というのは国技に近い。インドネシアとマレーシアは非常に盛んなところです。これまでマレーシアは歴代 11 個のメダルを獲得しています。そのうちの８個がバドミントン競技。前回のリオ五輪でも男子シングルス、男子ダブルス、ミックスダブルス、３つが銀メダル。日本にとってもライバルになる国になります。実はマレーシアは国のオリンピック委員会というのがあって、全競技大分県で事前合宿は丸ごとやりますという契約を結ぼうとしていました。一番の主要種目であるバドミントンだけ引っこ抜いたんです。ほかはどうぞ大分で。バドミントンだけこっち来てくれと。ありとあらゆる手を使ってアプローチしましたところ、それが功を奏してバドミントンは愛媛でやりましょうということになりました。今回、第１陣で、来年もジュニアの代表、それからナショナルチーム。それからオリンピック年にもジュニアの代表と直前合宿。これからもどんどん来ます。

今回は特に初めてだったので、愛媛県の代表選手たち、ジュニアとシニア一緒に来てくれたので、ジュニアの愛媛のチャンピオンと青年の部は国体選手に親善試合をやったらどうかと。国際試合の経験のいい機会なので。彼らが出てくれました。さすがに８試合やって７試合が愛媛の代表選手対マレーシアのナショナルチームだったんですけど、７戦全敗でした。やっぱりさすがナショナルチーム。ジュニアも強いです。１試合だけヨネックスというチームから今、日本の女子のバドミントンのレベルはすごく高いので、次の世代を担う 20 歳のペアを呼んで、マレーシアのナショナルチームとやってもらったんですけど。ヨネックスの選手が一昨年の世界ジュニアのチャンピオン。マレーシアの選手が昨年の世界ジュニアのチャンピオン。ものすごいハイレベルで、これは日本チームが勝ちました。オリンピックの事前合宿をやると、本当に間近でとてつもないクラスのレベルの試合が仕掛け方によっては見れるという機会にもなるので、いろいろとまた取っていきたいと思っています。

今、進んでいるのは、これは新居浜市さんがアプローチを盛んにやっているサウジアラビアのウエイトリフティング。国体のときに施設をつくった西条市。クライミングという日本でも盛んになっている。これについては強豪国のオーストリアが事前合宿を西条でやってくれることになると思います。それから、古い古い昔。松山の方が台湾に行って野球を教えました。そのチームが 70 年前に甲子園に出てきて準優勝している。その御縁もあって、今、台湾との関係もすごい濃くなっているんだけども。台湾の野球の事前合宿。これを松山市と愛媛県共同でアプローチしています。それから、もう１つが松山市の放置自転車を無償で提供してきた経緯があったので、これはＮＰＯの方がやってくれたんだけれども、そこの関係があるということでアフリカのモザンビークという国がもしオリンピック目指すときがあったら、モザンビークが丸ごと愛媛で合宿したいというアプローチがあって、これも実現していきたいなと思っています。

強化については、これは学校ごとのテーマになるんだけれども、国体で愛媛県代表選手になったメンバーの中にも、十数人はパラリンピックも含めて可能性は十分あります。そのレベルの子たちなので。それはぜひ応援してあげたいので、例えば、全国遠征の合宿等々の補助とか。そういうのをルールを決めてバックアップしていきたいと思っています。

さらに、オリンピックの後のことも考えているんだけれども、３年前からえひめ愛顔のジュニアアスリート発掘事業というのを始めました。これは愛媛県内にいる全ての小中学生が対象で自由参加です。アスリートにチャレンジしない、とアプローチします。だいたい 3,000 人から 4,000

人応募してきます。体力測定やります。第一次選抜で 200 人ぐらいにします。競争は仕方ない。200 人を第二次選抜をやって、今度はさらに一般的な体力測定から走るとか跳ぶとかを専門的な測定方法で確認をして、最終的に 50 人ぐらいに絞り込みます。これを最長５年間、アスリート育成のプログラムを組んで、いろいろなプロの専門家の方にも参加してもらってトレーニングします。お父さん、お母さんにはアスリートの育て方というので、栄養学とかメンタルとか、そういった指導を行っていきます。最終的にいろいろな種目を経験してもらって、もうセレクトされているから相当運動神経いいんです。君ならば、もしこの競技を追求したら全日本行けるよ、あるいは世界で戦えるよというアドバイスをします。ただし、それを選択するかどうかは個人の自由。「やっぱり僕はサッカーやりたい。」これはしょうがない。でも、この競技で少なくともやったら、とてつもないレベルまで行きますよという可能性を見出した子にはそういうアドバイスをして、今、この中から全日本の女子のラグビーの全日本選抜候補に選ばれていますので、こういう子たちを早い段階で育てて、愛媛からオリンピック選手や世界で戦える選手が増えてきたらいいなと思っています。

**≪補足説明≫〔スポーツ・文化部〕**

平成 30 年度全日本大学対抗テニス王座決定試合は、平成 30 年 10 月 10 日（水）～10 月 15 日（月）に愛媛県総合運動公園テニスコートで開催されました。全国の地区予選を勝ち抜いた男女各 10 大学が、大学日本一の座をかけて戦い、男女とも早稲田大学が優勝しました。選手・監督等約 400 名が参加しました。

**３．県の介護問題への対策及び地域活性化の観点からの予防介護の普及について**

医療方面、主に愛媛の介護問題でお伺いしたい。先ほど、少子高齢化と地域活性化と防災対策の３本柱でやっているという話をされていたが、その少子高齢化のことに関して。

今、愛媛でも高齢化が進んでおり、全国的にも劇的に要介護の方が増えているということを、最近、社会福祉の授業で習った。その授業を通して、予防介護の普及を行えないか、まだ今学生の身なので考えるだけではあるが、これから愛媛で就職して愛媛の一医療従事者となったときには、薬剤師として健康サポート薬局の普及であったり、地域包括ケアシステムをもっと発展させたいという思いがある。同じ予防介護といっても、要介護になった状態ではなくて要支援の状態の方だったら、心がけ次第で進行は遅らせられる方が多いと思う。要介護になる一番の原因は脳血管閉塞であり、そういう方は突如疾患を患って急に要介護になってしまう場合が多いので致し方ない部分はあるが、認知症であったら、日ごろの自分の生活によって予防できる面は多いと思う。

なぜ要介護申請をせずに予防しないのかと祖父母などに聞いてみると、地域包括ケアシステムがあるのは知っているけど地域に入っていけないとか、まだまだ自分は要支援とかには早いと思っているようだ。実際、健康サポート薬局とかで予防教室があるのは分かっていても、教室の周知も行われていないし、介護保険に対しての認知度が低く知らない高齢者の方も多く、将来医療従事者になる者としても、そういう普及はしていきたいと思っている。県としてどう介護問題を捉えているのかということと、これからどう対策されていきたいかということをお伺いしたい。

あと、先ほど地域の活性化のことについても３本柱でやっていきたいとおっしゃっていたが、予防介護が普及することによって、高齢者が街に出たり、より生き生きと活発的になると、愛媛の中から経済を回すこともできるし、一方で、介護のために離職する方も今結構いるので、そういう方が減ったら愛媛の労働力も増えるのではないか。地域活性化の面での予防介護の普及について、どうお考えか教えていただきたい。

**【知事】**

まず、大きな目で物事を捉えておく必要があると思うんだけれども、少子高齢化に伴う人口減少って一体どのくらい破壊力があるかということは、あまり議論されていないんですね。今、日本の人口というのは１億2,000万人で、出生率が1.40から1.45ぐらいになっていると思います。単純な図式ではないですが、簡単に言えば２人の御夫婦で1.4から1.45ぐらいのお子さんということになりますから、これを１億2,000万人の1.45の出生率を単純にパソコン上で計算していくと、人口というのは１億2,000万人が２人いなくなって1.45が生まれてくるということでやると800年後にゼロなんです。驚くことに。その経過として20年、30年経ちますと、１億2,000万人の日本の人口というのは１億人ぐらいになる見込みです。愛媛県だけで見ても今、138万人が100万人になります。一体それが現実化したら何が起こるんだろうということですが、簡単に言えば２つのことが想定されます。

１つは、日本の社会に構築されてきた社会保障制度が崩壊します。なぜならば、今の日本の社会保障制度というのは、働いて稼げる人の人口が多くて、福祉サービスを必要とする人口が少ないというピラミッド型の人口構造時代につくられたものなんですね。これが今、人口構造がだんだん、だんだん、ピラミッドからドラム缶型になり、今は逆ピラミッド型になってきたんですね。若い人が少なくて。日本人の赤ちゃんが１年間に270万人生まれていたんだけれども、恐らく皆さんの世代は100万人の時代ですから、３分の１とは言わないですけど、それぐらいに減ってしまっています。ピラミッド型でつくられているのが今の年金制度であり、医療制度であり、保険制度でありますから、これは稼げる人が少なくなって必要とする人が増えてきたら崩壊するのは見えている。この崩壊を食い止める方法は３つしかないです。１つは財源が足りないから、税金をだんだん上げる。保険料もごんごん上げる。これでカバーする。これが１つの道です。これが嫌だということになると、今度は施設を減らす。サービスを削りまくる。もう無理ですといって、削り倒すだけ削り倒す。これも嫌だということになると３つ目の選択肢しかない。その選択肢というのは、地域での共助をどう確立するかです。今までは制度に頼った仕組みだったけども、さっきちらっとは言ったけど、地域地域での助け合いや仕組みをつくることによって、これにはボランティアであったり、ＮＰＯであったり、いろいろな形態が考えられるんだけれども、そこと公的な制度を組み合わせながら乗り越えていくことを模索するしかないと思います。そうなってくると、むしろ東京とか隣近所のつき合いがほとんどないところは大変なことになると思うので、逆にそういう時代になればこそ、まだまだ地域のコミュニティがある地方のほうがいろいろな形にチャレンジできるのかなと僕は勝手に思っておりますけれども、まさにここは知恵のみせどころかなと思っています。

もう１つは、この制度については今言ったように地域のコミュニティというものに着目して、どういう力をつけていくかということに力点を置く。もう１点はまさに今あったように、健康寿命をどう延ばすか。これはイコール予防介護にもつながるんだけれども。どうやれば健康寿命を延ばせるかというのは証明はできないけど感覚的にいうと、生きがいとか、やりがいとか、そういうフィールドをリタイアした方々あるいは高齢者の方々に社会が用意できるかだと思うんですね。例えば、それが趣味の分野かもしれない、あるいはボランティアの分野かもしれない。それはいろいろなメニューがあっていいと思うんだけれども。

例えば、スポーツでいうならば、病院に行くより楽しいことがあったら病院に行かないです。外に出ます。例えば、松山の小野地区というところにふれあいいきいきサロンというのがあって、ここは成功例だと思うんだけれども。病院に行っていたお年寄りが病院に行くよりこっちのほうがいいと言って、みんな集まってくる。そこでは趣味を謳歌したり、高級なコーヒーをあえて提供してそれを販売する。その収益金でサロンを運営する。いろいろお年寄りはお年寄りなりに工夫をしているんだけれども。そういう地域ごとの拠点があるかどうかというのが１つポイントに

なってくる。

もう１つは、例えば、スポーツだったら、スポーツはもちろんする楽しさもあれば、さっき言ったように見る楽しさもあれば、応援する楽しさもあれば、支援する楽しさもあるんだけれども、やっぱり一番楽しいのはする楽しさだと思うんだよね。でも、ある程度の年齢にいってしまうとなかなか体が言うことを聞かない。だからスポーツはちょっとね、けがも心配、ということになるんだけれども。例えば、去年、愛媛では国体の後に障がい者スポーツの全国大会があったんです。今度パラリンピックもあるんだけれども。実はこの障がい者の全国大会のスポーツメニューの中には障がいがある方々が気軽にできるスポーツもたくさんあります。例えば、フライングディスクとかボッチャとか、いろいろな競技がある。これは誰でもできるんです。お年寄りでもそんなに体力必要なく、手軽にできて楽しいわけです。こういったものを普及させることによって楽しい空間ができるというのは、そんなにお金がかかるわけでもなく、用意するというのが１つの道筋なのかなと思っています。

それともう１つうちがこだわっているのは、せっかく愛媛県というのはこれだけ自転車に適した場所がたくさんあって、今、概ね 60 歳以上のシニア世代を対象に年に２回、クロスバイクの体験試乗会というのをやっているんです。みんなびっくりしているのは、こんなに敷居が低かったのかと。こんなに今の自転車って進化しているのか。こんなに楽しいものなのか。だいたい参加した人の半分以上はマイ自転車買うんです。例えば、南予に行くと道路は整備されている。でも、人口減少で悩んでいる。人口減少ということは自動車が少ない。逆転の発想で言えば、道路が整備されて自動車が少ないというのはサイクリングには最高や。島に行ったら、知事、信号がないんだよ、と言ったら、信号がないなんてサイクリングに最高や。

物事というのは、視点を変えることによって幾らでも活用方法は変わっていくので、そういうことを含めて先ほどのコミュニティ、趣味、ボランティア、スポーツという分野でフィールドを用意していくということが、まず切り口かなと思っています。

でも、それでもやっぱり介護が必要な人たちが出てきますから、ただこれは大問題なのは人口減少で人を確保できるのか。無理です、となってくると、これからやらなければならないのは外国人の方々も参入していただけるような制度をつくらなければどうにもならないということだと思います。今、我々の１億 2,000 万人の日本というのは、平均年齢が今 47 歳ぐらいです。みんなは低くする側で、僕はもう上に上げる側になってしまったけれども、アジアへ行くとこの構図が全然変わってきます。インドネシアが２億 6,000 万人、平均年齢が 30 歳。ベトナムが人口 9,000 万で平均年齢が 31 歳。フィリピンが人口が１億ぐらいだったかな。ちょっと自信ない。平均年齢 24 歳。もうめちゃくちゃに若い。完全に昔の日本がグアーといったピラミッド型の人口構造になっている。経済力がまだまだだから、働く場を求めていると思うし、スキルも求めているから、そこで Win－Win の関係がつくれるかという視点で取り組んでいけばいいのかなと思います。

ただ、一方で、今言ったような人口構造を持ったアジアの国々が日本を追い越せとがむしゃらにやってくる時代なので、皆さんの世代というのは、本当に競争が大変だと思いますから負けないように頑張ってほしいと思います。

## ４．災害発生時・緊急時に地方の首長が担う役割、取るべき対応について

先般の豪雨災害では、知事の迅速かつ親切味溢れた御対応で多くの方々が助けられた。私も大学の硬式野球部の代表として、部員を全員連れて計４回災害ボランティアに参加し、多くのことを感じ、たくさんのことを学ばせていただいた。

私は将来、市長を目指しているが、地方の首長として災害時、緊急時にはどのようなことを意識されていたのか。また、この間の豪雨災害を経験した後で、地方の首長としてどういう対

応をすべきだと思われているか教えていただきたい。

**【知事】**

それぞれの役割があるので、首長というのはどういう役割を担うかということになりますと、事態を的確に把握して、やるべき目標を見定める。ここが大事なところなんだけど、その目標に向かって組織をどう動かすか。マネジメントだね。ここがまさに首長の役割だと思っています。例えば、今回ですと、豪雨災害が起こって続々と南予方面から情報が入ってきました。でも正直言って、大変なことが起こっているということは頭でわかっても、松山にいたので、南予の状況というのは肌感覚では分からないわけ。大変なんだけどどんな状況になっているのかというのは想像でしか分からなかった。これが東京だったら一体どうなんだろう。人ごとになってしまうのではないかと思ったんです。ただ、被害の状況を分析すると県レベルで対処できる状況をはるかに超えていると。広島、岡山の状況も入ってきていましたので。一方で東京の国は、その状況は肌感覚で松山以上に全くわからない。ということで、被災３日目には東京に行きました。官邸に行って総理大臣と官房長官に大変なことになっていますと。これは愛媛だけの話ではない。国挙げてバックアップ体制を取ってくれなかったら乗り越えられるような規模ではないというのを伝えに行きました。そこで分かってもらってバックアップするということは、イコール財源をしっかりこっちに流してくれるという担保ですから、ここをまず取るということが第一段階でした。

帰ってきてから今度は災害対策本部を設置していますが、ここで言ったのは、スピード感を持つということを共有してほしい。スピード感を持つと同時に、それを達成するための方針を伝えたいということを申し上げました。今回、まず共有してもらいたかったのは地域を守るのが我々の使命。地域を守るためには、まず人を守る。次に生活を守る。次に産業を守る。この３つがあって初めて地域が守れるんだということを全員理解してほしいと。県庁の職員も、そこは災害対策本部ですから自衛隊も海上保安庁も、いろいろな機関に参加してもらっているんだけれども、人間ですからいつまでも緊張感を持って張りつめた神経で対処できるかといったら無理なんで。逆に働き方改革ではないけど、応援する側がつぶれちゃう。

そのときにふと思ったのが、当面の目標を明確にして、そこに向かってまず頑張ろうと。それが終わったら体力をにらみながら次の目標に向かっていこうということを示したほうがいいなと思ったので。第一目標がさっきのとおり。まず我々がやるべきは第一目標だと。第一目標は人命救助だと。そして避難所の設営、水の確保、住居の整備。この４つが第一段階の目標なので、そこに向かってともかくみんな集中的にスピード感を持って対応してほしいという。これが当初から毎回災害対策本部ごとに浸透させることを意図として言い続けてきたことなんだけれども。そこに向かって共有されると組織というのはがぜん動き始めるんですよ。これが思いつきで言ったり、あれ、こんな話だからこうやって、あれ、こっちの話はこうやって。統計的でもない指示が乱発されると組織は混乱してバラバラになる。

首長という立場で言えば、スピード感と明確な方針というもの。間違ってないですよ。誤りのない明確な方針を浸透させることによるマネジメントが大事だと僕は個人的には思っています。

**（参加者）**

ありがとうございます。

あと、意見というか、知事、僕たち大学生の質問に対してすごく真摯に答えてくださっているので、ほかの県の方々もいろいろ聞いてくださったらもっと、と思うのでよろしくお願いいたします。

**（司会）**

ありがとうございます。ホームページでまた紹介させていただきます。

## ５．少子高齢化が進む中での地域行事や伝統行事の運営について

私は現在、エミフルの広報ユニットの活動をしており、その活動の中で地域行事にもたびたび参加している。その中で、小さな行事、公民館だったり小さな自治体が行っている行事は、若い人の参加率があまりよくないなと肌で感じた。少子高齢化が進み、お祭りとか運動会などの地域行事の運営が難しくなってきていると聞いている。これから進行していく高齢化社会に向けて、地域行事のあり方を変えていかなければならないのではないかと思っている。

そこで、これからの地域行事や伝統行事をどのように運営されていくのか、知事のお考えをお伺いしたい。

**【知事】**

これは強制ができないから難しいんですよね。特に中予地域なんかは転勤とか、あるいは新しく移り住んできた方が多くなって、そちらの人数のほうが多いでしょう。協力体制の構築とか、コミュニティというのが本当にやりづらくなってきているんですね。

例えば、松山市に味酒校区というところがあります。ここは人口がどんどん増えています。なぜならば、マンションがどんどん建って、そこに転居で移り住んでくる人が増えているから。ところが隣近所の付き合いはほとんどありません。２万人ぐらいいるんですよ。この校区に。２万人の校区でありながら、ほとんどがそういう方々で占められているので、２万人の安全を担う味酒校区の消防団員。何人いると思いますか。

**（参加者）**

２万人に対して。50 人ぐらい。

**【知事】**

10 人程度しかいないんです。みんな地域のことはやりません。これでは駄目だということで、当時、松山市長だったんですけど、大変なことになるというので、幸いエミフルじゃないけど、フジの本社があったり自動車のディーラーもあるから、そこに呼び掛けて、職種によってはその場所に居続けるじゃない。例えば、自動車だったら整備士の人は営業で外へ出ることはないし、フジの本社があるんだったら事務の方々は本社の中にいるから、その企業の中に消防団をつくってくれと。就業時間中という限定で、味酒校区で火災が起こったときには出動してもらえないかという機能別消防団という仕組みを全国で初めて導入したら快く手を挙げてくれて、今、そういったところがカバーしてくれています。それから大学。当時大学生にも声を掛けて、大きな災害が起こったときに、大学生ならではの機能を限定した消防活動をやってほしいということで、当時体育会系を中心にやりましょうということになって。今も生きていると思うけども。例えば、避難所が設営されたときに、松山の場合は外国人も多いから外国人対応とか。あるいは障がいを持った方々のフォローであるとか。大学生ならではの訓練を積み重ねてもらって、いざというときの力になってもらえる。そんな消防団をつくって。ありとあらゆる形を積みながらカバーはしていきますね。

これほどの地域のコミュニティというのは、場所によってつくっていくのが難しくなってきました。そこで当時、地域の運動会、文化祭、こういったことは地域ごとに公民館単位でやっているけど、言われたように、昔から住んでいる人あるいは決まった人しか出てこなくなってきていますよね。どうしようかと考えたときに、２つ要因があると。移ってきたばかりだから知り合いがいないので、敷居が高いから行かないという人もいる。もう１つは、そもそも興味がないという人もいる。じゃあ、それをカバーするためにいろいろなアプローチをしてみようと。

当時、まず最初にやったのは、地域の子どもたちの安全・安心を見守りませんかと呼び掛けて、登下校時に青パトとか結成してもらって、地域のボランティアに参加するというメニューをつくったんですね。次につくったのが自主防災。自主防災組織というものを地域ごとに張り巡らせて、

皆さん、訓練しましょう、参加してくださいと呼び掛けたら、これは結構参加者が多かったんです。なぜならば、自分の命にかかわることだから。しかも家族の命にもかかわる。アプローチを変えると、今まで地域の行事に出て来なかったような人たちが参加し始めた。そのときに初めて人と人の交流が生まれる。そうすると「今度文化祭来てよ。」と言うと「いいですよ。行ってみましょうか。」知り合いがいたから敷居が低くなって参加が増えていくということが実際に起こるんだなということを経験しました。

こういうことを積み重ねていくうちに、今度は地域のまちづくり条例というのをつくって、まちづくり協議会というのを結成してください。この協議会は地域ごとに２年ぐらいかけて行政も一緒になって、このまちはこういうふうにしようというプランをつくってください、組織をつくってください。それが明確になったときにはお金を渡します。そちらの自己責任で自由に使ってくださいという制度をつくったんです。これ、今、松山市でいうと 17、18 校区この制度が始まっていますので。

それから当時、最初にこういう制度をやるからみんな立ち上がってくださいと言ったら、１カ所しか手を上げてくれなかった。「行政の仕事を我々に押し付けるんやろうが。」って言われたこともあるし、「そんなめんどくさいことできるか。」って言われたこともあって、１校区しか手を上げてくれなかったんです。何をやったかというと、１校区に全ての資源を投入して、フォローして、目立つようにして、ちゃんとやったところはこれだけのフォローがあるんだと見せつけたら、ほかの地域もうちもやりたいとか、そういうふうにやっていたんだけど。当時は批判があったとしても、まんべんなくやるということだけが行政ではないなと。ある程度の批判は覚悟してインセンティブの道筋をつけて、成功例をつくった後に広げていくというのも１つのやり方だなということは当時学んだことですね。

だから、確かに難しいテーマなんだけど、今言ったようにあの手この手で敷居を低くする、参加を促す、そしてそこで人の交流、絆をつけていく。そこで伝統の行事等々の参加に結びつけていくというふうに考えていかないと、一足飛びには難しいんじゃないかなということです。

## ６．保育関係者が自信を持って就職し現場で働けるような対策について

私は、大学の学生会の会長をしており、大学の附属幼稚園で、子どもとのかかわりを大事にした行事をたくさん行っている。現在、少子高齢化が進んでいて子どもの数も減っていると思うが、まだまだ待機児童がいるということも耳にしている。少子高齢化対策として、県全体で保育施設や保育の現場に携わる人員を増やしていくという対策を行っていると聞いた。

私たちは保育の勉強を一生懸命やっていて、ほかの職業の方々よりは専門的な勉強をしているという一種のプロフェッショナルという自覚もある。これから就職していくに当たり、保育の現場でもっと社会的に保育の人員が必要とされるという自覚を持ちたいという意見も学校のみんなから聞いている。私たちが自信を持って就職して働いていくために、日本全体でも必要だと思うが、県ではどのような対策を行っていただけるのかお伺いしたい。

**【知事】**

これは保育限定ではないんだけども、子育て支援という大きなテーマになってくると思うんですが、まず待機児童については東京はとてつもない人数になっているけど、愛媛県内はそれこそ０歳児とか特殊な対応は別として通常の待機児童ということになると、松山市が若干まだ足らないという状況であとはだいたいフォローしているんですね。これも難しいなと思ったんだけど、松山市長時代に、年度の初めに待機児童が 100 人いると報告があって、じゃあ、100 人の枠を増やしましょうと１年間かけて増やしました。翌年、ゼロになった？って言ったら「いや、180 人になりました。」って、この繰り返しだったんです。整備されればされるほど利用者も増えてい

くということで、ゴールなき対応だなと感じたことがある。それが本当に充実した形で使われているかどうかは確認しながら進めていく必要があるかなと思います。

ただ一方で、保育士自体の人数もきめ細かい対応ということになるとなかなか少子化の中で足らないという全国的なテーマがあるんですが、ここも実は介護と同じでおそらく外国人の方の力も必要になってくる可能性があります。ところが、日本の国というのは基本的に海で囲まれている単一民族国家なので、陸続きの他国と違って外国人の方の働き手が自由に行き来する環境になっていないんです。介護のケースで言うと、例えば、経済連携協定（ＥＰＡ）があるけれども、介護士の勉強しに来ます。勉強しに来て、最終的に日本国内の試験に合格すれば滞在が認められて就職ができるというふうになっているんです。でも、条件がある。試験は全部日本語で行ってください。別に英語でも母国語でも介護の知識というのは、別に日本語にこだわる必要はなくて、コミュニケーションの日本語ができれば十分に仕事は対処できるけど、あくまでも試験も専門用語から日本語の試験じゃないと取れませんとなっている。これはどうしてかというと、多分わざと落とすためにそうしてある。帰れという。そういうふうなところから変えていかないといけないのではないかということで、ずっと知事会とかでも言い続けてきたんだけれども、ようやくことしから英語が一部認められるようになりました。恐らくこうした介護の重要性、しかも少子高齢化の中で絶対数がいなくなってくるというところにまず対応する必要があるというのが１点です。

もう１点は少子化の対策として、さっき申し上げたように 1.4 から 1.45 の出生率が続いたら人口はどんどん減っていく。どうやったらこれを上げられるかとなってくると、またアプローチの仕方を考えていかないといけないんだけれども。

まずは具体的にいうと、これはアンケート調査で分かったんだけれども、皆さんは知らないよ、アンケートだから。結婚がなかなかできない世代。どうしてかと聞くと、出会いの場がないという意見が圧倒的に多かった。じゃあ、県で出会いの場をつくっちゃおうということで、９年前から婚活事業というのをやっています。しかも単に出会わせるようなやり方ではなくて、データを入力してビッグデータにして、それをフルに活用したマッチングシステムというのを開発して、例えば１対１だったら自己主張ができるけど複数は無理。あるいは 20 人という大きなパーティーだったら自己主張できるけど、５人ぐらいだと無理。性格はそれぞれだから、それをビッグデータ化してマッチングをうまくやっていったらカップリング成約率がどんどん上がってきて、９年間で愛媛県の婚活事業で１万 2,000 組のカップルが誕生しました。こういうふうなことから結婚年齢を下げていって第一子誕生の年齢が下がる。そうすると第二子、第三子ということも想定して、婚活事業を充実させていくのも１つ。

それから、子育て支援ということについては、愛媛県らしさを大いに生かした工夫をしようということで去年から始めたんだけれども、幸い愛媛県には紙関係の産業が数多くある。その中の３社は四国中央市に２社、西条市に１社あるんだけれども、これは日本の大手の紙おむつの製造メーカーですね。四国中央市にはユニチャームさん、大王製紙さん。西条市には花王という会社のマザー工場があるんですね。この３社にお願いして愛媛ならではの子育て支援をやりたいということで、快く引き受けてくれました。簡単に言うとお金を出してくれた。そのお金と皆さんから預かっている税金の県のお金と市町のお金を合算させて、去年の８月から始めたんだけれども、愛媛県に住んでいる方は２人目のお子さんが生まれたときには、３人目も４人目も含めて１年間、365 日紙おむつを無償で支給する。ただし、この３社の商品に限る。なぜならば県内で製造しているから。という事業を始めたんだけれども。こういうことも愛媛県にたまたまそういう産業が集積しているからできることであり、思わぬところに子育て支援のフィールドというのがあるのではないかなというふうに思います。

あるいは相談する体制も大事で、それぞれの市や町や県にも相談所があるけれども、なかなか若い人から見たら役所に行くというのは敷居が高い。だったら、皆さんの世代で一番簡単にアク

セスできるというとスマホじゃないかと。アプリを開発しようということで“きらきらナビ”というアプリを開発しました。これは、例えば何月何日に子どもさんが生まれますと入力すると、妊娠期にはこういうことを注意してください。何日前はこういうことを注意してください。生まれたら何日目はどういうふうなことですよ、予防接種はこうですよ、と自動的に必要なものがメールで送信されて、役所に行くまでもなく子育て相談ができるというスマホ上で展開する仕組みをつくったんだけれども、すでに数千人の方に活用していただいています。

こういったことを複合的にやっていく中で、それでもある一定の期間引き受けていただく保育の役割というのは非常に重要ですから。特に三つ子の魂百までという言葉に残っているように、この期間の対応というのは、その人の性格に大きな影響を与えるということなので、当然のことながら公立、私立を含めて研修の充実というのは常に図っていきたいと思いますし、皆さんの仕事が次代を担う人材を育成していく、育てていくんだということにはぜひ誇りを持ってもらいたいと思います。

**７．競技するアスリートを観客が間近で応援できるイベントの開催について**

私は大学の陸上競技部に所属して棒高跳びを専門種目として現在競技を続けている。昨年、今年と２年連続で、５月のゴールデンウィークに広島県で開催されているフラワーフェスティバルというお祭りの中のイベントである“ひろしまストリート陸上”に参加させていただいた。

このイベントは、普段車が通っている通路にゴムのタータンを敷いて、そこを実際にアスリートが走ったり跳んだり、また陸上競技以外にも体操や空手、クライミングなどもデモンストレーションを行っているものである。

このイベントの最大のポイントはアスリートと観客の距離が近いというところで、それによって、観客のスポーツに対する意識の向上や、地域の活性化や、参加したアスリートの競技に対する意欲の向上などが魅力としてあると思うが、愛媛県内で、このような観客とアスリートの距離が近いようなイベントを開催することについて、知事はどのような意見をお持ちかお伺いしたい。

**【知事】**

どの程度の規模でどの程度の内容なのかがちょっとわからないけれども、会自体のコメントはちょっと分からないです。いろいろな形が考えられるかなと思います。

例えば、愛媛マラソンだって同じようなことなんです。やるに当たってはハードルがかなりあるということを覚悟して臨む必要があると思うんです。実は、愛媛マラソンって今の形でやるようになったのは９年ぐらい前なんです。それまでは砥部の総合運動公園をスタート、ゴールにしてやっていたんだけれども。しかも４時間で走りきるということで、ほぼアスリートしか出れない大会だったんですね。10 年前の愛媛マラソンの出走者は 900 人台くらいしかいませんでした。当時、陸上競技連盟から、当時は市長の立場だったんですけれども、マラソンのコースを変えたい、市民マラソンにしたいということで相談があったんです。それはいいことだからやろうということで議論をし始めたんだけど、まあ、次から次へといろいろな壁が立ちふさがるんですね。例えば、当時はみんな反対していました。まずは鉄道会社。鉄道のダイヤに影響が出ると反対。バス会社、同じ理由で反対。商店街、客が来なくなる、反対。ガソリンスタンド業界。客がいなくなる、反対。北条のほうのゴルフ場連盟。ゴルフ場がいっぱいあるから。ゴルフ場連盟、冗談じゃない、反対。トラック業界。運送に支障を来す、反対。警備が大変だ。警察が反対。もう全部反対。これを１個１個つぶしていって２年かかった。ようやく６時間の制限時間を持った今のコースに変わるんですね。でも、最初はどんな大会か分からんということで 5,000 人ぐらいでやってみようかと言ったら、3,800 人しかエントリーがなくて、責任取れとか言われて、責任って

何って言ったら、「あんた走らんかい。」って言われて走らされたんだよ、マラソン。それが初マラソンだから。3,800 人でやったら、それがテレビ中継されて、すごい面白そうだなということになっちゃった。翌年も 5,000 人でやったら瞬く間に埋まった。翌年は 7,000 人にしたら瞬く間に埋まった。翌年は 8,000 人にしたら瞬く間に埋まった。今、全国に 1,800 ぐらいのマラソン大会があるんだけれども、３年前と２年前は愛媛マラソンは参加者の人気投票で全国第１位になった。

これは走ったら分かるけど、フラワーフェスティバルのアスリートと同じかもしれないけども、要は空気だよね。走った人いる？あの空気すごいでしょ。６時間、沿道からの声援が絶えないんだよね。しかも沿道ごとに応援の仕方がどんどん変わっていくわけ。あそこに行ったらチアガールさんが応援してくれる。あそこに行ったら太鼓台が出てきたり。あそこに行ったら獅子舞が出て応援してくれるとか。どんどん風景が変わっていく。場所ごとに今年はうちはこれやって言ってタルトが出てきたり、坊っちゃん団子が出てきたりみかんが出てきたりイチゴが出てきたり。本当に何とも言えないおもてなしの空気が６時間続くんだよ。だから市民がつくり上げたアスリートとの触れ合いの空間があそこにあったので、今ではもうエントリーして 20、30 分したら埋まっちゃうくらいの大人気の大会に育っているんだけれども。

そんなことを想定しながらどんなイベントをやればいいのかを考えていくと、何かいいアイデアが出てきそうな気はする。ただ、漠然とあそこがこんなことやっているから同じことをやってみたらどうかというぐらいだとちょっと面白くないかなと。そこらへん知恵を絞って提案してみてよ。どういうのをやったらいいのか。

**（参加者）**

具体的にですか。

**【知事】**

例えば、どこの場所でどの規模でどういう趣向をすれば人は集まるとかって。

**（参加者）**

やっぱり、交通とかを止めてしまうとまた問題が出てくると思うので、自分が面白そうだなと思うのは、やっぱり大街道。だったら、全部を通行止めにするのではなくて、端っこは通れるようにしたらお客さんも通れるし、そんなイベントを開催することで大街道に集客して、大街道での収益が上がるというか、大街道が活性化されるのではないかと思うのですが。

**【知事】**

そうですね。大街道だと柱が所々あるから。まあ、あそこでプロレスをやったことがあるからできないことはないと思うけど。どういうふうな組み立てをする？大街道の今の責任者は若い人で、結構イベントとか積極的にやる空気があるので提案してみたらおもしろいんじゃいかな。

**（参加者）**

それはどういうふうに提案すればいいですか。

**【知事】**

突っ込んで行くんだよ。こんにちはって。お会いしたいですって。僕はそうやって生きてきたから。ぜひ。断られそうだったら、中村知事が行けって言ったんですよって。

**（参加者）**

行ってみます。ありがとうございました。

## ８．愛媛の犬猫殺処分減少に向けた県の対策について

専門学校で愛護サークルに所属し、動物のボランティア活動を中心に去年から活動している。このサークルに入ったきっかけは、１年生のときに学年全体で動物愛護センターを訪れ、殺処分の現状や飼い主としての責任についての講話を聞き、私たちの立場からできることをやろう

と思ったことである。
　サークルでは盲導犬支援育成募金活動やネコの譲渡活動のお手伝いをしており、ネコの譲渡活動では２匹のネコの新しい飼い主が見つかった。また、サークルのみんなで話し合い、大学生が放課後勉強を教えている子どもたちに、動物との触れ合いを通して動物の命の大切さを知ってもらうことを目指した活動を始めた。子どもたちの中には初めてイヌを触った子もいて、とても楽しんでくれている様子である。今後は動物看護・栄養管理学科、トリマー学科、ドックトレーナー、ペットビジネス学科の体験をしてもらい、楽しく学んでいくことで将来動物を大切に思う人になってほしい。
　愛護センターのデータによると、平成 29 年のイヌ、ネコの殺処分数は合計 2,327 頭で２年前に比べ約 450 頭減っているが、まだたくさんの命が失われており、私たちのこのサークル活動が少しでも貢献できればいいなと思っている。
　愛媛の殺処分減少に対する対策として、知事の意見をお伺いしたい。

**【知事】**
　本当はね、殺処分ゼロにすれば一番いいんだけれども。それをうたっているところもあるけど、じゃあ、本当にそれがゼロになっているかというのは、いろいろな背景があると思うんだよね。例えばほかの県に行っていたりとか。だから、現実これだけ捨てイヌ、捨てネコ、特に転勤するときに置き去りにするという方が多いと聞いているので、やっぱり飼い主のモラルが根っこにあるということは間違いないと思います。愛護センターのみんなだってやりたくないんですよ。そんなこと。だから、できれば飼い主のモラルが向上して、新しい飼い主への譲渡制度が大いに生かされて、新たな飼い主がせめて見つけられたらなということに今後とも力を入れていきたいと思いますし。特にネコへは、県獣医師会が行っている野良ネコへの避妊手術事業に対し補助をしているので、それを促して避妊・去勢手術を受けていただくということも今まで以上に浸透させていかなければいけないと思っています。
　動物というのは、人を癒やす力を持っていると思うし、特に最近は直接触れるということに癒される、あるいは求めている人が増えているのは間違いないです。だから東京なんか行くとネコカフェとか、そういったものが一昔前に比べたらものすごい増えている。動物園にしたって、今、砥部でもいろいろ検討しているけど、より一層動物と触れられる時間、空間が人に来てもらう重要な要素になっているということをみんなで考えながらやっている。例えば、カピバラ。どこかの動物園がある時間帯になるとカピバラが出てきて、カピバラがドデンっとお腹出してそれに触れるというのを売りにしたらものすごい人気が出ちゃったもんね。愛媛のとべ動物園にもカピバラがいるから、あれこの前ニュースで見たんだけど、うちのカピバラもやってって言ったら、性格上無理と言われて。個体によって性格が違うんで難しいと言われたんだけれども。でも、そういうふうな触れ合いというのが人を癒す、人を穏やかにしてくれる力を持っている。セラピーなんかもそうだと思うけど。ぜひ、そこは念頭に置きながら殺処分を減らすということについては常に頭に入れながら対応していきたいと思います。
　これは県だけではとても無理だから、それこそ皆さんのような学生や、あるいは今ＮＰＯ団体も頑張ってくれているので、常に連絡体制を取りながら。例えば、こういう補助制度をつくったら変わる可能性があるという提案もこれまでもらっているので、そういった現場の声を聞きながらサポート体制を充実させていくということが重要ではないかと思います。

## ９．子どもたちへの食育及び愛媛の食の魅力を伝えることについて

僕は大学に入ってボランティア団体に所属していて、１、２回生のときは、よく児童館にボランティアに行って子どもたちと一緒に遊んだりしていた。

そのボランティアの中で気付いたことで、これは児童館の職員もおっしゃっていたことであるが、子どもたちが元気に遊んでいるのはいいが、お昼御飯を食べずに遊んでいる。食べるのもお菓子とかジュースだけで済ませてしまって、ずっと何も食べずに遊んでいる子どもが多いというのを聞いた。ちょうどそのとき僕と一緒に遊んでいた男の子の兄弟がいて、「お兄ちゃんと一緒に御飯が食べたい。」と言ってくれた。僕はお弁当を持っていたがその子たちは何も持っておらず、家が近かったので御飯を取りに行っておいでと言って待っていると、10 分くらいしたら手にカップ麺を持っていた。一緒に食べたが、やっぱりちょっと複雑な気持ちで、健康面でこれはどうかなと思っている。僕が行っていた児童館ではそういう問題もあって、子どもたちと一緒にカレーとか簡単な料理をつくって一緒に食べるというイベントをやったりしたが、そのイベントにはいっぱいお子さんが来てくれた。

あと、今全国的に子ども食堂などがすごい増えていると思うが、子どもたちに対して食育というか、健康面も、愛媛は特産もあるので、そういった魅力を伝える機会であるとか、取組みを何かされているのかお伺いしたい。

**【知事】**

子どもの食事というのは、親も含めた食育の教育普及というのに啓発的に力を入れていかないとどうにもならないというふうなことがあると思うんですよね。ただ、本当に難しい時代だというのは、共働きが当たり前の時代になったので。また、男性の家事等々への参加も時代の流れになってきているので、僕らのころとは考え方、価値観が違ってきているんだよね。でも、変わらないのは食の大切さだけは間違いない。みんなどんな食生活をしているかは知らないけれども。

僕は昔、偏食で体調不良になったことがあって、徹底的に栄養学から勉強した。で、本当にこれは大事なんだなと。例えば、人間の体というのは１日に３度栄養が定期的に入ってくるということを前提につくられているから、朝昼晩３食とるというのはすごく大事なんだよね。かつ、そこでとる栄養についても、総カロリー量と栄養のバランスというものが非常に重要であって、例えば、総カロリーだったら最低でも男性は１日 1,800 キロカロリー、女性は１日 1,400 キロカロリー。栄養バランスといえば肉、魚の主菜。御飯は穀類。それから野菜、乳製品、根菜類等。これらで1,800キロカロリーというのをそれぞれバランスをとってやるというのが一番健康を維持する秘訣であるということが分かってきた。それを実践したら見る見るうちに体調がよくなって、食というのは本当に重要だなというのが分かりました。だから、より一層、いろいろな機会に今みたいな話。自分が偏食で体を壊したから、余計伝えるようにはしています。

ただ、今は遊び方もね。児童館なんかはまだいいけど、それこそ僕らのころはそんなものないから、野を駆け山を駆け、とまでは言わないけども、外へ行って、アウトドアで遊ぶというのは当たり前で、その世界というのは何か物があるわけじゃないから、例えば、これを使って隠れ家をつくろうとか、陣地をつくろうとか。いわばアナログの世界。でも、アナログの世界だから工夫しながら、思索しながら遊びを考えてやっていったところがある。でも、今はどっちかというと家の中でプシュプシュする時代でしょ。決してアナログではなくて、デジタルの世界であって。でも、考えてみるとデジタルの世界ってどんなに複雑なゲームであれ、デジタルというのは基本的には０と１の二進法の世界だから、二進法の組み合わせでつくり上げられたもので、思索を深めることはできるはずがない。だから瞬間的な達成感とか、そういうところで楽しんでいる世界があって、どうなのかなって個人的には正直思っています。プシュプシュやるとどうしても暗い部屋でスナック菓子、コーラがぶ飲み、カップ麺と、なんか定番なんだよね、これ。栄養バランスからいっても、健康面からいってもいいはずがないので、ぜひそういう食育の重要性と遊びの

楽しさというものについては、児童館のまさに真骨頂のフィールドだと思うので、頑張ってほしいというところです。

いずれにしましても、これも生き方とか生活の仕方というのは強制ができないから難しいね。だから粘り強く、今言ったような食育の重要性というものを広めていくことによって、親御さん、子どもさんの食も考えてよっていう、社会の空気をつくることが回り道になるようで近道なのかなという気はします。

愛媛の食については、これはいろいろなところで宣伝しているので、これは県内だけでなく、業として育てていくために、県外、海外においてもガンガン売りまくっています。僕は昔商社にいたんですね。商社にいて、物を売るというプロの世界にいたので、今の仕事をいただいてからは県庁に公務員ではまず考えられない仕事をやろうじゃないか。営業本部というのをつくって、外に向かって物を売るという仕事を県庁の中に取り入れました。今、その部隊にいる県庁職員はほとんど県庁で見ることはないです。どっちかというと公務員は机の上でやっているというイメージがあるけど、彼らはそんなことやったって数字が上がらないから、毎日どっか行って突っ込んで行って。さっきの話じゃないけど、飛び込みも含めて突っ込んで行って開拓していくことが仕事になっているので。

愛媛県産の食べ物については本当にうまいものがたくさんあります。手前みそじゃないけど。だから生産量でいえばかんきつの生産量が全国１位。しかも種類が豊富。それから、キウイフルーツの生産量も全国１位です。それから海面養殖業、魚。宇和海を中心に養殖の魚。これも全国１位。しいたけが３位ぐらいかな。いろいろな分野で全国に誇れるものがたくさんあります。しかも最近は、さっき言ったもう１つのもうけ口である飛びっきりの品質を追い求めて売っていくということにも力を入れているので。例えば、豚肉でこれ以上の豚肉は僕はないと思っているのが、“愛媛甘とろ豚”。それから昨日、力貸してくれって言って、愛媛県出身の芸人に宣伝に一役買ってくれと言って引き受けてもらったんだけど、“愛媛あかね和牛”という脂肪分を抑えた和牛肉というのが売りなんだけど、この宣伝に手を上げてくれたのが「和牛」というお笑いの２人。１人は愛媛出身だから。あかね和牛を和牛が売るというのが一番いいなということで、そんな形でＰＲというのは、あの手この手でいろいろやっています。

## 10. 愛媛県の性感染症者数を減少させる方法について

私は今、看護師か助産師を目指して勉強している途中で、ピアサークルというサークル活動を行っている。愛媛の南予、中予、東予含めて、いろいろな高校や中学校、大学のほうにもお邪魔させていただいて、性の正しい知識を伝えたり、自己肯定感を高めるような活動をたくさん行っている。その中で、性感染症について話す機会もあるが、そんなこと知らなかったという高校生の生の声が聞ける。高校生には、先生からの授業であまり伝わっていないこともたくさんあるのかなと感じている。

今、日本でも性感染症というのはふえ続けていて、その中で特に最近言われているものに梅毒が挙げられると思うが、愛媛でも増加傾向にあるというデータを見た。全国では平成 30 年度に減少しているが、愛媛ではまだまだ増加傾向にあるということで、すごく残念な印象を持った。また、女性での感染者数は、私たちの世代である 20 歳代が一番多いとされていて、どうにか防げたらいいなと思う。感染者数を減らしていくというのは、予防としても難しいかもしれないが、保健所や地域の保健師の方々と協力して何か行っていければいいかなと思う。難しいことではあるが、何か知事の考えをお伺いしたい。

**【知事】**

難しいよね。

**（参加者）**

ほかの病気と違って性感染症って予防したら防げることも全然あると思うので。性って生きていく上で大切なことなので何か考えがあれば教えてください。

**【知事】**

今一概には言えないけど、高校での今の生徒のお話を聞くと知らなかったという声が多いということは、現場での指導とまでは言わないけど啓発に、かつてと比べると後退しているところがあるのかもしれないね。そもそも梅毒というのは、一時日本で激減して、ほとんど語られなくなっていたので、ちょっと僕も正直知らなかった。最近の傾向については。ちょっと僕、教育委員会の現場ではないから、責任持ってこういう話があったということは教育委員会にちゃんと伝えますので、こんな状況があるんだから調査してみたらどうってことは必ずやってもらうようにします。

**（参加者）**

ありがとうございます。

**【知事】**

僕自身はどうしたって、ちょっと分からないね。はい。

**≪補足説明≫〔教育委員会〕**

各中学校及び高等学校では、学習指導要領に基づき保健体育科（中３・高１）の授業の中でエイズや性感染症の疾患概念や感染経路についてなど指導をしています。

また、養護教諭を中心に、医師会や保健所、保護者等と連携を図り、生徒が性に関する悩みを相談しやすい環境づくりに取り組んでいるところです。

## 11. ７月豪雨災害に対するメディアの動き及び災害発生時の初動体制等について

先日起きた西日本豪雨のことについて。僕の出身地の広島県の三原市も大変な被害を受け、家族も避難を強いられる状況だった。僕は被害に遭った家族がいたので生の声が聞けたが、報道が意外と少なかったということを聞いた。

愛媛もひどかったが、僕はそのとき松山にいたので、大洲市のことなどはテレビで拝見した。一番被害がひどかった岡山県の真備町などは全国でニュースになっていたが、三原も本当にすごく、僕も実家に帰って手伝いをした。そんな中でメディアにあまり取り上げてもらえなかったという声をいろいろな人から聞いて、メディアとの連携がなっていなかったことが犠牲者の数にもつながったのかなと思っている。多分、こうなることを予想していた人は少なかったと思うので、仕方のない部分はあったのかなと思うが、それでも母も祖父も祖母も、もっと早く情報を伝達してもらいたかったという声を聞いたので、愛媛県も同じような被害を受けており、これから改善していくとこではあると思う。

三原市では、次もし同じようなことが起こったときは、いち早く情報が伝達されるようにと各家庭にラジオが支給されたが、愛媛県では、具体的に次、同じような災害が起こったときにどのような対策をとるのかということをお伺いしたい。

**【知事】**

まず、メディアの動きについては、これはもう我々がどうだということは言えないので、各社それぞれの思いで取材するので分からないけれども。言葉悪いけれども、一番被害が大きかったと思えるような場所といえば、岡山、真備町だと思うよね。亡くなられた方も多いし、混乱したんだよね。真備町は。倉敷市に合併して、初動があまりうまくいっていなくて、混乱したところにマスメディアが行く傾向がある。まだこんな状態です。あー失敗します。そういうところがあ

ったのかなと。マスコミがどんどん行くということは、被害が大きかったと同時に行政としてうまくいっていないところにあえて行くというパターンもあるので、出ればいいかということでもない気がする。それは僕らも何とも言えないけれども。

ただ、行政は行政で、例えば県内で言うと、被害が大きいと皆さんのニュースとして飛び込んでくるのは吉田町と野村町と大洲だと思うけど、それ以外にも結構被害があるんですよね。例えば、今治の島。大三島もそうだし、松山だったら中島地区や興居島、高浜地区もそうだし。南予に行けば鬼北町、松野町、八幡浜、内子町。みんな被害を受けているので。もちろんその被害の度合いと対象人数は、さっきの大洲、野村、吉田が圧倒的に多いんだけれども、マスコミはほかを取り上げないけど、行政はそうはいかない。だから、僕も今年の夏は返上で当初はその３つの方向性だけやらなければならなかったので重点的に行っていたけど、７月のめどが立った時点からは今言った大三島とか松山とか八幡浜とか内子とか全部行っています。そこは行政がしっかりカバーしていくということをやっておくことが必要なので。それはそれぞれの県ごとにどうやっているかは分からないので三原がどういう状況だったのかは何とも言いようがないんですけどね。少なくとも愛媛においてはあらゆるところに気を配りながら職員も動いてくれていると思っています。

もう１つ、初動なんだけれども、これは本当に難しい。愛媛県も防災無線、ＦＭラジオ、スピーカー、この３つですでにやっているんですよ。ただ、それが有効に機能したかどうかは別問題。例えば、警告の防災無線とか、普段スイッチを切っていてもこちらからの操作でスイッチをオンにできるようなやつを配布しているんだけれども、寝るところが２階で、めんどいから１階の居間に置いとったから全然聞こえなかった。そういう人もたくさんいるんです。それから、サイレンもここまでの豪雨じゃなければ聞こえたのにな、想像を絶する豪雨だったので聞こえなかったとか。これは検証してみないと分からないんですよ。

だから、今度の議会で、１カ月経ったので我々が思いつきで言うよりは専門家の方にも入ってもらって１つ１つ検証し、一体どうだったのかなということで改善策も含めて半年ぐらいかけて報告書を出してもらおうと思っているんです。その報告書に基づいて改善できるところに手を入れていくということを考えています。だから、９月の議会で検証の予算を上げる。それから動いて年度末だから来年の３月までに報告をぜひしてもらいたいということで、検証の組織を動かそうと思っています。例えば、サイレンも最近、性能が上がっているから、豪雨であっても聞こえるようなことを数を増やせばできるかもしれないし、それは専門家に聞いてみないと分からない。防災無線もそれぞれの家庭に置いてもさっき言ったようなケースで全然役に立たなかったというケースもあるので、そういったものもしっかり見極めていかなければいけないと思っています。

**≪補足説明≫〔県民環境部〕**

今回の災害に対する県、市町及び防災関係機関の初動・応急対応等について、専門家の意見を生かしながら検証し、教訓や課題等を分析・整理するため、９月補正予算で所要の経費を計上のうえ「愛媛県平成 30 年７月豪雨災害対応検証委員会」を 10 月に設置し、11 月 6 日に第 1 回委員会を開催いたしました。

平成 30 年度内には報告書をとりまとめる予定であり、今後は、同委員会による検証結果や提言を踏まえ、防災・減災体制の更なる充実・強化を図っていくこととしております。

## 12. ７月豪雨災害等災害発生時のボランティア活動について

僕は身近で災害を感じたのでボランティアというか手伝いにも参加したが、あまり関係のない、普通に生活をしていたら、ボランティアに行きたくても情報がなくて参加できないという学生もたくさんいると思うので、そういった呼び掛けとかも大切になってくると思うが、その

へんのことについて知事の御意見をお伺いしたい。

**【知事】**

ボランティアの受付については、現地の市町でどこにニーズがあるのかということでマッチングをしてもらっているんだけれども、ただ、南予の人ってすごい穏やかで人がいいから、「うちは大丈夫ですよ。」と。本当は大丈夫じゃないけど、それでボランティアはあまり要りませんという結果になっているケースもあったようなので、そこらあたりもまた検証課題かなというふうに思っています。学生については愛媛県の大学事務局にお願いして、夏休みの学生たち、バスの手配はこちらでやるのでボランティア参加していいという子たちはぜひ送ってほしいということで、どれぐらい行ってくれたのかな。結構行ってくれているよ。特に南予は農業関係の被害が大きかったので、農学部とか、そういう学生たちがかなり行ってくれているようです。

**（事務局）**

全体で２万 3,000 人。

**【知事】**

特に８月に入ってから募集したんだよね。学生。

**（事務局）**

そうですね。学生は分からないですが、全体で２万 3,000 人。

**【知事】**

分からない。ということで、皆さんの各大学の事務局にお願いして募集もかけさせてもらっているので、こっちにいないとなかなか情報も入ってこないということかもしれないけど。意外とこういうのは新聞とかテレビには結構出ているんだけれども。最近、このまえ高校生に聞いたんだけれども、ニュースのサプライソースっていうのかな、キャッチするルートというのが、まず新聞を読んでいないという子が多いのにびっくりしました。インターネットが大半ですというから。

これは大学生の皆さんもこれから社会に出るに当たって、僕が言っていることが正しいかどうかは分からない、新聞は読んでおいたほうがいいよ。なぜかというと、インターネットに氾濫している情報でひっかき回されると、間違った判断をするケースがある。というのは、あまりにも身勝手なフィルターにもかかっていない情報が氾濫して、意図的にそっちの方向に持っていこうとする悪い連中もあの世界にいっぱいいるから、その情報に振り回されると社会の中で全く異質な結論にたどり着いてしまうケースがあるので。ところが、新聞やテレビというのはちゃんと第三者委員会というのがあって、この情報はおかしいだろうと、この書き方駄目じゃないのって、必ずフィルターがかかるので。そこである程度の違いはあっても、あまりにもっていうのはフィルターがかかるようになっているから、そこは正しい情報になってきます。かつ、活字というのは漫画やビジュアルと違って、やっぱり自分の中で組み立てていく。さっきのアナログじゃないけど思索を深めていくトレーニングができるから、新聞の情報、テレビの情報というのはやっぱりこれから社会に出ていく準備期間に入った皆さんからすれば身につけておいたほうがいいんじゃないかなという、個人的にはそんな気がする。

## 13. 愛媛の食材を県外に広める活動や取組みについて

今年の春に、“MADE IN EHIME”という食のイベントのイタリア料理コンテストで、県産品を使ったレシピを提案させていただき、愛媛の食材をイタリア料理に使えるということを改めて感じた。先ほども県産品のお話を伺ったが、愛媛の食材を広める活動や取組み、また先日の豪雨災害で被災された生産者の方の復興など、今後、力を入れていきたいとお考えになっていることがあれば教えていただきたい。

**【知事】**

さっき申し上げたように、愛媛県庁には営業本部というのができましたので、彼らは中小企業のものづくりの技術を売り込む場合もあれば、直接的に愛媛県の農産品を売り込むこともあれば、いろいろな活動をしているんですね。ちなみに６年前に商社のノウハウはこういうものだから、みんなやってみようよって呼びかけたときの初年度の売り上げは８億円ぐらいだったんですけど、２年目が 26 億になって、３年目が 56 億になって、４年目が 89 億になって、５年目が 100 億になって、昨年度は多分 110 数億円になると思うんですが。それだけ新規の開拓がどんどんでき始めているんですね。もちろん、そういった営業部隊の活動もあるけれども、やっぱりいいものだから売れるんですよ。いいものじゃなかったらどんなに営業頑張ったって売れないんですね。

愛媛県ってすごく恵まれているところがある。例えば、東京のホテルで愛媛フェアやりたいとアプローチすると、びっくりされるのが、愛媛県って全部を一気に揃えられる珍しい県ですねって言われるんです。北海道ですら魚介類等々はすごいものがいっぱいあるけど、１県で全ての食材は揃えられないんですよ。だから北海道フェアやるときも北海道単独ではなくてどっかと組み合わせてその食材を利用する。でも愛媛県って全てあるんですよ。ところが灯台下暗しで、そのことを知っている県民がどれだけいるかと言ったら、その価値に気付いていない人が本当に多いと思うんですね。そうですね。例えば、イタリアンとかいろいろなスイーツに使えるといったら、かんきつっていうのは圧倒的なパワーを持っていると思うんですけど。かんきつ１個とってみても、みかんがたくさん採れるんだよねっていうくらいはみんな知っていても、細かい魅力にはまだ気付いていない。愛媛がほかの産地と違うのは、１年間いろいろなかんきつをつくっていることによって、毎月違ったものが供給できるという強さを持っています。

今、愛媛県のかんきつ、市場に出しているのが 40 数種類あります。例えば、９月から 10 月になると、青いみかん、極早生みかんって出てきて、それが黄色になってきて、早生みかんが 11 月に出てくる。12 月になると東京に持っていったら１個が 2,000 円で売れる“紅まどんな”という最高級フルーツが出てくる。年明けると“いよかん”が出てくる。“甘平”“せとか”が出てくる。“清見”が出てくる。“カラマンダリン”が出てくる。５月、６月になると愛南町あたりで盛んな“河内晩柑”が出てくる。全部味が違うんです。しかも１年中何かが供給できる。宇和島だったら“ブラッドオレンジ”が最近は出てくる。味が違う、香りが違うということは、それだけ料理に活用できる素材が愛媛県にはかんきつだけでもたくさんある。

キウイもさっき１番と言いましたが、緑色の“ヘイワード”という品種だけではなくて、“ゴールドキウイ”もあれば“レインボーキウイ”もあれば“サンゴールド”もあれば、いろいろな種類が愛媛県内で生産されているわけです。

牛肉。さっきも“愛媛あかね和牛”という話をしたけど、これも５年間かかって出来上がったんですけど、ほかのものとは全然違うんです。なぜならば、昔は牛肉というと、サシの多い肉が好まれた傾向があったんだけれども、最近は健康志向で赤身とうま味を求める人が多くなった。そこに目をつけて、霜降りというのは肉の質としては高いけどサシだらけ。Ａ５ランクと言われているのはサシだらけ。それがむつこいという人が多くなったら、霜降りの高級感を残して、黒毛和牛を素牛としながら改良に改良を重ねて、Ａ４ランクの赤身肉にしたら売れるんじゃないかというのが当初のスタートだった。現場に聞いたらやりたいというから、これも５年かかったんだけれども、黒毛和牛の素牛を使って育てたＡ４ランクの肉ができた。これがあかね和牛。成分分析すると、通常の霜降りのＡ５ランクの肉と比べたら脂肪分が 30％ダウンしているんです。うま味成分というのは、グルタミン酸の含有率にかかっているんだけれども、これが約２倍になっています。それをきちっと伝えたら売れるわけです。

“愛媛甘とろ豚”。これは５年かかったけども、愛媛県がもう１つ日本一の生産量を誇る裸麦。これを研究所で試験やっていたらいけるということで、３つの豚を掛け合わせて、しかも愛媛県

が誇る裸麦を餌にして育てていったら、オレイン酸という成分が多く含まれる豚肉が出来上がったんです。この成分が多いと、融点が変わるんです。36 度で溶け始めるから、ちょうど口の中の温度と同じなんです。だから、脂が口の中で自然に融解されていく肉に仕上がったんです。これをしゃぶしゃぶにしたらびっくりするくらいうまいわけ。これはイケると思って大阪に売りに行った。阪急百貨店の購買担当者のところに行って、とにかくだまされたと思ってこの甘とろ豚をしゃぶしゃぶで食ってくれと、しかもレタスで包んで、愛媛県産のユズの入ったユズポンで食べてくれと言ったら、「なんやこれ。」って。それまで阪急百貨店というのは、７店舗大阪にあるんだけれども、豚肉コーナーは東北の豚だった。これは物が違うということで、今全部、甘とろ豚に変わった。これだってイタリア料理で大いに使える。

鶏肉。“媛っこ地鶏”これは４つの鶏を掛け合わせて、数年前に“どっちの料理ショー”という番組があったんですけど、そのときに特選素材に選ばれたのが、この媛っこ地鶏です。

というふうに、みんなが商品知識を持って、地域のよさを受け止めて、宣伝したら売れるものがいっぱいある。だから、ぜひ料理を目指していくんであれば、こんなに食材が豊富なところはないから。その食材をどう生かすかということを考えて、そのためには商品知識を持ってほしいと思います。今の一流のシェフたち。東京等で三ツ星取っている人たちの店でもどんどん今、採用してくれ始めていますから、そういうところで広まってくれたらいいのではないかなと思っています。

ちなみに、甘とろ豚は県外に行くと高値がついているけど、地元だと手の届く値段で、フジに行くと甘とろ豚のパックがあるから、だまされたと思ってしゃぶしゃぶとレタスはササッ。ポン酢は鬼北町のユズのポン酢で食べるのもよし。ポン酢が苦手な人は、地元にヤマキ、マルトモというかつお節の日本ワンツーの会社が伊予市にありますけれども、だしはマルトモの濃い目のだしがおいしいけれども、甘とろ豚にはヤマキの白だしがぴったり。あれでしゃぶしゃぶってやったらやめられなくなりますので、チャレンジしてみてください。